堀川開削410年をふりかえる

堀川をめぐる人びと

いつも心に川がある
堀川まちづくりの会企画展

女工哀史を一変させた川上絹布創業　川上貞奴

一世を風靡したマダム貞奴

川上絹布立ち上げ、二葉邸主人に

川上貞奴（貞）は夫川上音二郎の七回忌を終え、大正７年（1918）若い頃に面識があった福沢桃介の誘いで、名古屋にモダンな邸宅を作り、パートナーとしての生活が始まる。川上絹布という会社を上飯田の堀川近くに立ち上げ、主に輸出向けの絹のサテン（繻子）、クレープ・デ・シン（フランス縮緬）、ジョーゼット・クレープ（経緯縮緬）など高級織物を織った。4､50 人の若い女性が働き、女工哀史を一変させる職場を作り、憧れの工場となった。全寮制で、テニスコートやプールも工場内に設けられ、45 分働き 15 分休憩、昼休みにはテニスを楽しみ、夜にはお茶やお花、和裁などの習い事をし、休日には演奏会などのレクリエーションが行なわれた。

貞奴が暮らした二葉邸（文化のみち二葉館）

わが国の女優第１号

明治４年（1871）東京日本橋の両替商の第 12 子として誕生。踊り、三味線などの稽古に加え、馬術、水泳なども熱心だった。明治 27 年、23 歳の時オッペケペー節で人気の川上音二郎と結婚、夫と共に一座をつくり、貞奴と名乗って日本初の女優となる。32 年、28 歳でアメリカへ巡業、公演を成功させ、イギリス、フランスでも好評を博し、翌年欧州 18 か国を巡演し世界的に有名になる。41 年、37 歳の時、東京に「帝国女優養成所」を創立、松井須磨子などを育てた。44 年、夫の音二郎が 47 歳で死去、その後も「貞奴一座」として各地を公演していたが、福沢桃介の誘いに応じ引退を決断した。

川上貞奴（文化のみち二葉館提供）

電力王福沢桃介のパートナー

大正７年（1918）11 月名古屋に移住、福沢桃介のパートナーとなると共に、「私は今迄絹物ずくめで暮らしましたから、今度は世間の人の絹物を製造したいと思っています」（報知新聞 7年 11 月 23 日）との思いで絹布事業を立ち上げる。９年に二葉邸が完成するが大不況になり、絹織物が売れ行き不振に陥る。11 年３月上野の平和博覧会に出展するも、翌年９月関東大震災発生などで業績が回復しなかった。13 年５月福沢桃介は大井ダム建設資金集めで渡米、外債募集に成功したのを契機に、貞奴はかねて温めていた若手の育成のため、青山に「川上児童楽劇団」を創設する事を決意、併せて工場閉鎖を決め、東京と名古屋の往復生活が始まった。劇団は御園座、帝国劇場などで公演したが、昭和７年（1932）閉団する。団員には若き水の江滝子や清川虹子らがいた。

くつろぐ姿の川上貞奴（文化のみち二葉館提供）

翌８年、二葉邸を売却して日本ライン沿いの鵜沼に名古屋の宮大工伊藤平左衛門により貞照寺を建立、近くに別荘萬松園も建て1・5・9月の不動尊縁日には訪れ、二葉邸にも立ち寄った。21 年 75 歳で熱海の別荘にて死去、貞照寺に葬られる。

女優を職とし経済的にも自立

12 歳のおり、母の病気の危篤に際して、酷寒水垢離の行に励み成田山不動尊に一心不乱に祈った。不動明王の神護により病気が平癒したこととして、信仰心がますます強くなり、それが後の貞照寺建立に繋がる。

乗馬練習時に野犬に追われた馬が暴れて落馬、その時通りかかった岩崎（のちの福沢）桃介が介抱、それで面識が出来たと言われている。

童門冬二の『川上貞奴　物語と史跡をたずねて』には次のような評言がある。

> 気性が強く、じっとしておれない性分の貞奴。女はかくあるべしという封建道徳の枠を超え、女優を職とし、経済的にも自立した貞奴は、女性解放運動に伍して評価されるべき存在ともいえる。
>
> 「大正十三年頃、木曽川を横断してダムを築き水力電気を起さんとする福沢桃介氏の爲め一身犠牲の念願を籠め、空前の難工事を完成せしむ」（貞照寺案内より）

貞照寺彫刻画の一場面（貞照寺案内より）